

第 35 回総会 研究発表要旨

古仏語訳セネカ『ルキリウス宛倫理書簡集』の文献学的研究 宮下拓也

セネカの『ルキリウス宛倫理書簡集 *Ad Lucilium Epistulae Morales*』（以下『書簡集』）は 14 世紀のフランス語訳が存在する。それはイタリアのカゼルタ伯 Bartolomeo Syginulfo de Naples の注文により、フランス語のネイティブではない翻訳者によって作られた。しかしこのフランス語版『書簡集』の校訂テキストは 1970 年の M. Eusebi による部分的なものしかない。ゆえに全体の校訂を目指すこととした。

フランス語訳『書簡集』は A、B、C、D、E の 5 つの写本で伝わっている。Eusebi とは別の箇所（プロローグから第 10 書簡まで）を見てこれらの写本間の関係を再検討する。こ AC にはなく BDE にはある文章が複数あること、AC が「より難しい読み」を共有していること、共通誤記があることから、大きく AC / BDE と分けられると思われる。AC 間の関係についてだが C には文単位の脱落があるため A が C の元になっているとは考えられない。C が A の元になっている可能性については今回見た範囲でははっきりと否定する証拠は見つからない。だが、第 77、第 80 書簡の見出しが C では存在せず、A には確かにあるため、この可能性も否定される。また BDE 間の関係についてだが、どれも脱落箇所があるため、他の写本の元になっている可能性はない。E は BD からも分けられる違読を数多く示すため、E は BDE のグループ内でも下位グループを成すと推察される。最終的に Eusebi が示した系統樹と同じものに至ることとなった。

ラテン語のテキストと比べて、その訳はどの程度正確なのだろうか？ 実際に読み比べてみると、概して文字通りに訳されているものの、表現が変わっているところや書き加え、省略も頻繁に起こっていることがわかった。

仔細にテキストを見ていると、特殊な用法ではないかと思われるものが見つかる。ラテン語の *luxuria*（贅沢）・*luxuriosus*（贅沢な）の訳語として *luxure*（好色）・*luxurieux*（好色な）が使われているが、これらは「贅沢」という意味で読むべきではないだろうか。また、*conscientia* の訳語としてそのまま *conscience* が使われているが、「良心」では文意が通らない箇所がある。ラテン語における意味を考慮に入れる必要があるといえる。

セネカ受容、語彙論、翻訳論など深めていくべき観点はいくつもある。さらなる研究が望まれる。

マンディアルグにおける 19 世紀フランス幻想小説の影響
—ゴージェ、バルザック、メリメを中心に
松原冬二

20 世紀の幻想作家アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ (André Pieyre de Mandiargues, 1909-1991) は、古典主義的な幾何学構図と、血とエロスのドラマをともなうバロック的な情念の融合という文学スタイルによって、文学界に孤高の位置を占めてきた作家である。ブルトンを信奉するマンディアルグは、シュルレアリスムの「驚異」概念、すなわち日常風景における詩的イメージの突然の噴出という超現実的な状況を、みずからの幻想の核として利用しつつも、一方で、19 世紀フランスの幻想文学から多くの影響を受けて、そこから吸収した幻想の理念をこうしたシュルレアリスム的なイメージに融合させながら、独自の文学空間を拓いてきた。本発表では、ゴージェ、バルザック、メリメという 19 世紀の幻想作家に焦点を当て、マンディアルグの幻想における彼らの影響を探った。

第一章では、マンディアルグの描く幻想世界において顕著な細密描写をともなう「リアリズム」の傾向と、テオフィル・ゴージェの文体との影響関係について考察した。とりわけ 1982 年に再版されたゴージェの幻想小説『スピリット』と、それに付されたマンディアルグの序文をとりあげ、ゴージェを「現代精神 *esprit moderne*」の先駆であるとするマンディアルグの真意に迫った。すなわち、この小説がリアリズムの手法を用いて、いっさいの現実感 (リアリティ) を失うことなく、「常軌を逸した」幻想的な事象をそのまま自然なものとして受けいれてしまっている状況こそが、現代の幻想の作り手が倣うべき規範であるとマンディアルグは主張するのである。

第二章では、バルザックにおける幻想の主題としての神秘思想が、どのようなかたちでマンディアルグの幻想美学に結びついているのかを検討した。人間の現実面ではなく、暗黒面に関心を寄せるバルザックの幻想を高く評価するマンディアルグは、1966 年に再版されたバルザックの小説『あら皮』に寄せた序文のなかで、この小説の構造を支配する異教的な「二元論 *dualisme*」に注目する。人間精神の抱える光と闇を「両性具有」というイメージをとおして啓示するバルザックの神秘思想は、創作における神秘体験としてのアンドロギュヌス幻想を希求するマンディアルグの文学観へと反映している。

第三章では、メリメの幻想物語における考古学とペダグンティズムにフォーカスし、『イールのヴィーナス』をフランス幻想文学の最高傑作だと位置づけるマンディアルグに、メリメの文体がもたらした幻想美学上の意義について考察した。物語に歴史的なリアリティをもたらすメリメの考古学的な語りの中に自らのスタイルの原型を見出したマンディアルグは、術学的な議論が幻想のリアリズムを構成する不可欠な要件であるという理念に達する。